

The Danube Quarterly

ドナウ通信



2008（平成20）年・新春号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin



January

S	M	T	W	T	F	S
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

February

S	M	T	W	T	F	S
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	

March

S	M	T	W	T	F	S
2	3	4	5	6	7	1/8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

目次

新年のご挨拶

鍋倉 眞一 1

運動部長就任にあたり

西条 貴満 2

運動部情報

釣り部

秋のグレーリング釣り

関本 正 3

ルアーとフライ

岩根 典靖 5

極寒での修行

中島 辰巳 7

行と業

上田 英治 7

テニス部

土曜テニスに寄せて

小黒 朋広 8

ゴルフ部

1年の活動を振り返って

町田 憲善 10

ランニング部

今年の大会予定

盛田 常夫 12

日本人学校

「第二十八回海外子女文芸作品コンクール」入賞作品 13

松下隼也・小林亜海・右手あんな・菖蒲結衣
園田葵衣・布留川結衣・橋本直樹

第3回ドナウ祭感想文特集

野際美奈・杉田夏生・山下芽惟・野際佳奈
堀川智生・佐藤陽香・小松幹

みどりの丘日本語補習校

現状と今後の展望 白石勝久 19

読書

福岡伸一を読む 盛田常夫 23

小説

電車とタクシー 岩井孝博 28

牛で見る世界経済 作者不詳

ご挨拶

日本国大使 鍋倉 真一

新年明けましておめでとうございます。日本人会の皆様も新たな気持ちで新年を迎えておられると思います。まずは、昨年日本人会の運営にご尽力頂きました関係の皆様にお礼申し上げますと共に、本年新たに日本人会運営に係わる関係者におかれましては、引き続き宜しくお願い申し上げます。

さて、昨年末の日本人会総会でも申し上げましたが、早いもので、私もハンガリー着任以来、既に1年が経ちました。昨年1年を振り返りますと、麻生外務大臣の当地ご訪問に始まり、日本・ハンガリー協力フォーラム第3回会合の開催や日本がハンガリーから温室効果ガスの排出権を買い取るための二国間協力の署名が行われるなど、両国の政治、経済、文化のいずれの面においても大変実

りのある1年でありました。

本年3月には、ハンガリー政府要人の訪日も予定しており、また、2009年は「日本・ハンガリー国交樹立140周年」及び「国交回復50周年」という記念すべき年に当たり、本年はその準備の年となります。2009年は様々な事業が計画されており、皆様からのご支援・ご協力をお願いすることもあろうかと存じますので、宜しくお願い致します。私共と致しましても、日本・ハンガリー両国の益々の友好・協力関係の強化に向け、万全の準備を進めて参りたいと考えております。

他方、こうした両国間関係の進展に伴い、在留邦人は毎年着実な増加をみせ、現在1200人以上の方々ハンガリーに在留されています。在留邦人数の増加傾向は今後も続くものと思われ、それを反映して日本人学校も、3年前の開校以来児童生徒数が増加してきています。現在開

校当初の3倍増となる約90名の児童生徒が日々勉学に励み、現地校の生徒達とも活発な交流活動を行っております。

現在、日本人会には在留邦人全体の約3分の1に当たる方々が入会されています。このように多くの方々が現在既に入会され、また、今後也在留邦人の増加に伴う入会者の増加が見込まれる中、日本人会の運営には益々苦勞が伴うことになるかと存じます。一方今後、日本人会に期待される役割もそれだけ大きくなっていくと思いますので、役員並びに事務局の皆様の一層のご努力を期待したいと思います。毎年、ソフトボール大会、運動会やゴルフ大会といった行事が催され、在留邦人は勿論、ハンガリーの方々との親睦を深める機会も提供されております。私も昨年初めてソフトボール大会に参加させていただき、心地よい汗をかきながら、皆さんと楽しい1日を過ごさ

せていただきました。多数の方々の参加を得てこうした行事が恙なく執り行われるのも、ひとえに、役員及び事務局の皆様の日頃のご尽力の賜物であります。本年もまた、日本人会の益々の発展と諸活動の円滑な実施のため、会員の皆様には、役員及び事務局の方々を盛り立てつつ、日本人会に対する一層のご支援・ご協力をお願い致します。勿論、大使館も微力ながら、支援・協力を惜しまないつもりであります。

最後になりますが、皆様にとりまして、本年が素晴らしい1年となりますように心からお祈り申し上げます。



運動部長就任にあたり

西城 貴満

はじめまして、西城です。このたび運動部長という大役を頂き、いさしか緊張しております。

今回のお話を飯尾さんから頂いたとき、私のような者には責任が重過ぎると、一度お断りさせて頂いたのですが、前部長の飯尾さんより、「これからは若い人の力で、新しい風を呼び入れてほしい」というお言葉を頂、微力ではありますが、私も少しでも何か日本人会運動部のお役に立てればと思いお引き受けした次第であります。

最近子供の運動不足が深刻化しているのをテレビのニュースで見ました。子供には「ゲーム脳」、大人には「メタボリック症候群」こんな言葉をよく耳にするようになりました。これは本当に悲しむべき現状と私は思いました。体を動かすことが気持

ちいい、外の空気がすがすがしい、ということをお子供たちと共に大人も感じていけるといいと思います。暗く寒いハンガリーの冬ですが、工夫次第で体を動かすことができると思います。

皆様、是非体力づくりに努めていただきたいと思います、時にはご家族で。楽しい冬をお過ごしください。

最後になりましたが、今後とも皆様のご指導のもと運動部を盛り上げて行きたいと思えます。

どうぞよろしく願います。



運動部情報

釣り部

秋のグレイリング釣り

関本 正

鱒というのはサケ科に属する魚で、大きく分けるとサケとマスに分類されます。マスと言えば、日本では、イワナ、ヤマメ、アマゴ、イワナが海に下ったアメマス、ヤマメが海に下ったサクラ鱒、アマゴが海に下ったサツキ鱒、北米原産のニジマスが知られています。ところが、世界的に見ると日本には居ないけれどもシベリアからヨーロッパ、北米にかけて広く住んでいるマスの仲間がいます。それが、グレイリングです。

グレイリング(Grayling)は英語名で、ドイツ語ではエーシヒ(Aesche)、

フランス語では(iombre)という名前です。特長は、マス族にしては小さな口、一方広げるととても大きな背びれ(ドイツ語では Fahne: 旗と呼ぶほど大きいひれです)、マスでは殆ど目立たないウロコがコイ科の魚のように大きい事でしようか。また、アユのような香りがするのも特徴です。陽気で餌に飛びつくニジマスとは違い、フランス語の「影(iombre)」という名前の如く、餌を食わせるのに一苦労する魚で、川の特定の流れに沿って流れてくる餌しか食べない、また、餌に不自然な動きがあると食ってくれないという気難し屋です。そのグレイリングが比較的釣りやすくなるのがヨーロッパの秋。一〇月末そのグレイリングを狙いにオーストリアの山中へ向かいました。

参加したのは釣り部創部時の2名、どんな逆境でもめげないと自称するハードコア・メンバーのNさんと私

です。一〇月末の山ですから、雪、氷は覚悟の上。ハンガリーからオーストリアへ入ります。山は白く、途中早めの昼食をとったパーキングは新雪に埋もれてます。

「気温が低くてもお日様さえあれば釣りになる！」

とお互い気合を入れて(慰めあいながら?)道を急ぎます。

ホテルにつき、事前手配の釣り券を購入し更に川へ向かいます。気温は低いものの太陽は出ていて、水面には魚の跳ね(ライズ)がそこそこに見られます。

グレイリング釣りでは、小さい毛鉤が必須です。川を横切るように対岸めがけて毛鉤を投げ、毛鉤が自然に流れるよう糸をくれたり縮めたり操作しながら、下流に流します。毛鉤が視界から外れかかったところで魚が跳ねます。

「かかった!!」
下流に流しており流れの重みが加わ

ってますので、アワセを軽くしないとハリスが切れてしまいます。細心のアワセで魚をかけ、竹竿の弾力を生かし慎重にやりとり、取り込みます。

最初のグレーリングを釣った後が続きません。水面への跳ねは続いているので何か羽虫を食べているのですが、それがなにか判らない状況が続きます。

「何を食っているのかな。。」ふと、水から上げた毛鉤を見ると何か黒いゴミのようなものが付いています。よく見るとかなり小さな黒っぽいカゲロウです。魚が食っているのはその虫に違いありません。

毛鉤箱から「Snipe & Purple」という毛鉤を選び結びます。これは紫の絹糸のボディに英語でスナイプと呼ばれる小鳥の胸毛をハラリを結んだだけのシンプルな毛鉤で、英国北部発祥、通称「Northern Country Spider Fly」と言われる毛鉤です。

色合いとサイズからして今見たカゲロウに一番近い毛鉤です。対岸めがけて投げ、毛鉤を下流に流します。

毛鉤はすっかり沈んでいるので目で追う事は出来ません。竿先にくる感触と第六感が頼りです。30ヤード程糸が出てこれ以上流せないところで魚の気配を感じます。軽くアワセを入れると竿先がグツとしなります。

グレーリングはニジマスに比べるとひれが弱いのか取り込みは楽です。慎重に取り込んだのは38センチのメスでした。

気温は3度程度、水温も低く、Nさんも当方も体はがちがちに凍えます。その日は5時で釣りを終えホテルに帰り、厨房に魚を渡します。「ヘア セキモト、アーバー シェーネ フィッシュェニ（関本さん、いやまあ、立派な魚なこと！）」Nさんとサウナで体を解凍した後、

新鮮なグレーリングのグリルで一杯やりました。

次の日はお日様の顔を見ることが出来ず、魚のライズもない厳しい状況でしたが、貧果のまま3時まで粘りがちがちに凍った体のままブダベストへ帰りました。

ハードコアのNさんとは十一月の第3週の週末、別のオーストリアの川で釣りをする約束でしたが、その前に雪が降り、予約した宿からも来ないほうがいいと説得され、やむなく断念しました。

寒い時期の釣り修行、それがグレーリング釣りです。体が凍えても釣りをしたいハードな皆様、一度如何でしょうか。



ルアーとフライ

岩根 典靖

まだ出張ベースでハンガリーに来ていた2007年1月、関本部長にご挨拶に伺った折に、日本人会の釣り部への御勧誘頂いたのが事の始まりです。元々日本でも釣りを少々嗜んで私にとつてはまさに渡りに船ということ喜んで参加させて頂くことにしました。

さて、一口に釣りと申ししましても様々なスタイルがございます。私が日本でやっていたのは「ルアー・フィッシング」というスタイルで、ルアーと呼ばれる木やプラスチック、金属等で出来た疑似餌をキャストして（投げて）、アクションを付けながら巻き取っていくことによって生きた餌のように見せかける釣りです。ハンガリー日本人会釣り部の「フライ（＝西洋毛針）」ともども西洋発祥生き餌を使わないお洒落なスタイルで、

日本でもゲーム・フィッシングあるいはスポーツ・フィッシングと呼ばれる、特にバラック・バス・フィッシング（最近悪者扱いされている外来魚ですね）などは結構なブームとなっております。

で、この「ルアー」と「フライ」ですが、恐らく馴染みの無い方々にとつてはどちらも同じようなものだろう、と思われる事だろうと思いますが、実はそのコツと言いますか技術的ツボが全く異なります。一言で言うるとルアーはシャープな手首のスナップを使う釣りであるのに対し、フライは手首を使うにはNGで、ロッド（竿）と腕をまっすぐ一体化させゆつたりとロッドを振ることが要求されます。スポーツで言うところの「バドミントン」と「テニス」です。もともとルアーはそれ自体がある程度の重さがあるので、キャストする事自体はタックル（道具）にもよりますがそれほど難しいもので

はありません。女の子でも数回も練習すれば「釣り」にはなります。

一方、風に舞うタンポポのように軽い毛針であるフライはそれ自体では全く飛びません。そこでフライ・ラインと呼ばれる一般の釣り糸のイメージからするとはるかに太い毛糸のような特殊な糸（と言うか紐）を使い、この糸の重さを使ってライン、ロッド、腕を一体化させ、しなやかに、ムチのように、あるいは新体操のリボンのように振ることによって先端のフライをポイントに運びます。が、これがまあは結構な高等技術で、始めてすぐ出来るようになる代物ではありません。鍛錬／修練が必要です。更に悪いことに私は結構長年ルアーをやっていた癖が染み付いているもので、無意識に手首を使っている、これに苦しめられることになっているのであります。

さて、前置が長くなってしまいましたが、実釣の話であります。ハン

ガリーに着任して数ヶ月、月例の「爆釣の湖釣行ツアー」に参加させて頂くこととなりました。ちなみに赴任するにあたって関本部長のご推奨の番号のタックルを揃えてやって参りました（勿論部長の「工芸品」には遥かに及びませんが・・）。結構意気込んでの参加であります。

車に乗ること約6時間（！）、無事爆釣の湖に到着。始めの20分ほどは実釣ではなく、部長から基本的なロッドの振り方をレクチャー頂きました。十数回振ってみて、まあなんとかなるかな、というところまで来たところで、いざ湖に向かい実釣です。最初は岸から（運悪くボートが無かったから）部長と並んで釣り始めました。しかしながらやはりうまく行かない！横目で部長の様子を伺うとまさに新体操選手がリボンを操るかの如くロッド／ラインを操られ、真っ直ぐ前にラインが飛んで行き、フライはフワリと着水します。

そして、水面に浮いたフライにイワナが飛びつき部長のロッドは綺麗な弧を描きます。「ああ、自分も釣りたい！」釣り人の悪い性です。

人が釣っているのを見ると血がたぎってきます。自分も釣りたい！と渴望するのです。そうなると気持ちだけが先に立ち、折角教えて頂いたフォームも疎かになり、ついつい手首を使ってしまします。するともう悪循環で、ラインでバチャバチャ水面を叩き魚を散らしてしまうわ、空中でラインはこんがらがるわ、挙句の果てには「自分」を釣ってしまうわとえらい騒ぎです。見かねた部長から「手首使っちゃダメ！」とのご指摘が入ります。分かっちゃいるけど直らない。気を取り直し逸る気持ちを抑えて無心にフライをキャストすることだけに専念です。その甲斐あってかどうか、何とか数匹の魚とはご対面できました。が、一応それなりに釣り経験のある私にとっては

納得のいく釣果とは申せません。

結局年内2度の釣行にお連れ頂きました。おかげ様で2回目の釣行では最終的には何とか関本部長の半分ほどの釣果を得るところまではこぎ付けることが出来ました。私の他にも何人か初心者の方がいらつしやいます。皆に嫌な顔ひとつせずにご指導される関本部長部長には本当に心より感謝しております。また運転の出来ないお荷物私を仲間として暖かく向かえ入れて頂いている他の釣部の方々にも同様に深く感謝しております。この場をお借りして再度お礼を申し上げたいと考えます。有難うございます。

釣りを別にしても、日本に居たときには想像も出来なかった美しいオーストリアの自然／風景に（おまけにブタのようなユーモラスな顔をした牛）に囲まれての何かをするということは、何とも言えない贅沢な時間であると思います。

極寒での修行

中島 辰己

何時もは明媚な眺望の中、心地良い日差しを浴びながらの湖釣行なのですが、我が釣りクラブのハードコア・メンバー（誰が付けたのか？）の関本部長と私は、去る一〇月下旬、粉雪舞う溪流での釣行（修行です）に。標高1400m、オーストリアの溪流で水温より低い気温の中、凍える足先と震える手で数匹のブラウン・レインボー・グレーリングを釣上げ、ホテルに戻りサウナに入り十分に暖を取った後、釣った魚を賞味するという、とても贅沢な遊びです。

私はソルトルアーフィッシングが殆どだったので、元々餌代惜しさに溪流でルアーを始めたのが20年以上前。つまり溪流釣りは餌釣り以外では原点なので、思い入れもあります。溪流釣りは不規則な流れが伴い足場も悪い故に難易度が高く、

湖のようにバカスカ釣れるわけではありません。またここでの溪流は人里離れた僻地という程ではありませんので、通りすがりのハイカーやジョギングしている人、その辺のガキ、いやお子さんの視線もたまには浴びながらのプレッシャーが加わることもあります。が、これを苦にしているけません。この時釣れば、どんなもんじやう、ですから。因みに私はこの時には1匹しか釣れませんでしたが。しかも極小サイズが。「フッ、小さいな」と苦笑し、即リリースするしかありません。見て欲しくなかつた。

ともかく溪流釣りは「釣れた」ではなく、「釣った」喜びが味わえる釣りです。是非一度経験されることをお勧めします。まあ極寒での釣行なら、本当に一度で懲りる人もいますかと思いますが（笑）。

行と業

上田 英治

それは「行」だった。疲労と孤独を癒すはずだった。かつこよくてスマートなフライフィッシングとは程遠かった。パスポート持参、車5時間、ボウズ覚悟の極寒溪流。

なぜこの人たちはそこまでして釣るのか。翌日夕方こたえが出た。湖では釣れた。

気づけば震えながらも熱中。ほば無言。長年連れ添った夫婦のごとく。

あうんの呼吸でボートを移動。そしてまたヒット。イワナとの交渉で直接的なビックビク感。

間接的な優越感を得た後、リリースと言う名の免罪行為でカタルシス。完結している。

釣りは「業」だった。それにしてもツラかった。でも楽しかった。また行きたい。（どないやねん）

テニス部

土曜テニスに寄せて

小黒 朋広

今から3年前にハンガリーに赴任し、土曜テニスに参加させて頂くようになり1年半が過ぎようとしています。赴任直後は家族ともども異国の生活に慣れること精一杯で、週末に一人出掛けてゆく事などとても出来ませんでした。が、お蔭様で今では家族全員がハンガリーでの生活をそれなりに楽しむ事が出来るレベルになってきました。

なかでも土曜テニスの存在は私の中で日に日に大きくなる一方で、週末のテニスを楽しみに「平日の業務を頑張っている」くらいになっています。そんな楽しいテニスライフを少しばかり

り紹介しようと思います。

皆さんご存知だとは思いますが、日本人会テニス部は3部に分かれていきます。上級者が集まる日曜午後チーム（実際には、今の入部基準は「体力だけ」だったりするんですけどね）。初心者から中級者がターゲットの日曜午前チーム（「和気あいあい」という雰囲気があるメンバーの皆さんから醸しだされていて、結構魅力的だったりします）。そして、中級者がメインの我々土曜午後チーム。

各チーム間のコミュニケーションもとても良く、最近は何かとお酒を飲む機会なんかもあったりします。交流会（飲み会）では、世代を超えていろいろなバックボーンを持ったテニス仲間が集まり、とても楽しい時間を過ごす事が出来ます。なかで

も最近台頭してきた20代とそれ以上の世代とのあいだで交わされる会話は秀逸です。

ミドルM：「好きなテニスプレーヤーって誰なの？」

ミドルO：「僕はやっぱりマッケンローかな？ボレー下手やけど」

ミドルN：「エドバークも捨てがたいよね。そういえばHさんのラケットってエドバーク・モデルだよね！」

ヤングI：「誰っすか、それ？」

ヤングS：「聞いた事ありません。。。」

ミドル面々：「沈黙。。。」「といった具合です。」

テニスの話題だけではなく「テレビ番組」「憧れのアイドル」など、一事が万事こういった調子で会話が続けられるので、20代にしてみれば極めておっさん臭い話題に付き合わされて

いる苦痛な時間なのかもしれない。でも、おじさんにしてみると「なんともこたえられない時間」だったりするので、余計に始末におえなかったりします。若い皆さん、ごめんなさい。

時には、こんな事も起きたりします。

土曜テニスは午後3時から始まるのですが、当然ながらそれまでの時間は他の方々がプレーされてます。なかにはコート整備の時間も惜しんでギリギリの時間までプレーされている人もいらっしやって、そんなある日の出来事です。

いつものように3時5分前くらいに到着したら、激しく打ち合う地元の方々が。。。

3時になっても終わる気配がなく、たまりかねた私が「3時から予約してあるんだけど。。。」とおずおず申し出たところ。

おじさん：「僕達は隣のコートで4時まで予約してるんだけど、今接戦で水を差されたくないから4時までコートを交換しよう！（英語）」

ミドル私：「そういうことなら。。。」
ブツブツ。。。（英語+日本語）

そこへやってきたのが頼れるSさん。

ミドルS：「今日は人数が多いので、2面予約ですよ。って、あれえー！！」

ミドルS：「（流暢なハンガリー語で抗議しているらしい）」

いそいそと帰り仕度を始める地元のおじさん連中。

ミドル私：「4時まで予約してるって言うってたのは何だったの??？」

要するに、なんでもありません。いのです。

そんな私もハンガリーに来るまでは、テニスなんて中学生の

時に軟式テニス（今はソフトテニスって言うんですね！）を少々かじった程度で、硬式ボールなんて打った事ありませんでした。自分自身「ちゃんと続けられるかなあ？」と半信半疑で始めたテニスですが、今では私のテニス熱が子供たちまで波及し、週末にはテニスクールに通いだすようになりました。まだまだ子供には負けられないので、これから土曜テニスで技術を体力を養いたいと思っていきます。それと。。。いつか親子でラリー出来る日が来る事を、ほんの少しだけ夢見ています。皆さんもテニスしませんか？楽しいですよ。



ゴルフ部

1年の活動を振り返って

町野 憲善

12月に入り、07年のゴルフシーズンは終了しました。08年3月末のシーズン明けまで、どのように週末を過ごそうかと考えて、何もしないままの週末が続いています。

パット、素振り、腹筋強化。考えるは易し、しかし ???。

ここで 07年の日本人会ゴルフ部の活動をまとめてみます。

先ず、特筆すべき事は、10月のジエトロ主催（スロバキア国幹事）の第3回4カ国対抗戦において 昨年を引き続き、優勝したことです。07年は オーストリアの会場、アウエーで不利な条件下でありましたが、見事に 優勝カップを持ち帰ってきました。総勢、36名の各国代表選手がチーム戦、個人戦に凌ぎを削り

ました。

ハンガリーからは 大デレゲーシヨン、12名の精鋭を送り込みました。試合当日の移動ではなく、前日に、体力温存、チーム力結束のため、チャーターバスで移動。その足で会場に乗り込み 練習ラウンド。コース観測、グリーンコンディション確認し、選手各自、それぞれの戦略を立てました。

試合前日の前夜祭ではしやぎすぎ、飲みすぎが計画段階から心配されていましたが、見事に その誘惑を断ち切り、万全のフィジカルコンディションで試合当日を向かえることが出来ました（第1回目の時は前夜祭が本当の祭りとなり、結果は大敗）。

10月21日の試合当日は初冬の気温になり、風が強く、早いグリーンに悩まされましたが、我が、ハンガリーチームは練習ラウンドでの学習効果が実り、個人戦、団体戦とも見事に優勝。残念ながらベストグロ

スには1打及ばなかったが89と見事な個人戦の成績でした。

団体戦は上位5名の総合成績で争われ、オーストリアチームに17打差を付けて ブッチギリで優勝。おそろいの、赤色のチーム帽子が一段と大きく見えた試合でした。

08年は チェコが幹事となることが決定しています。

ここで、07年のゴルフ部月例会のまとめをします。

月例会回数9回（3月から11月まで毎月）

会場：パンノニアゴルフコース5回、オールドレイクコース回

参加者総数：189名、（1大会当り平均21名の参加者）

参加企業総数：約27社
年間ベストグロス：82打（第1回大会、パンノニアにて）

1大会当りの平均ストローク数（グロス）107打

最小ストローク数（ネット）：
7 1 打
最大ストローク数（ネット）：1 3
3 打

ゴルフ部は、月例会以外は比較的近場で、最もコース条件が整い、整備の行き届いている、パンノニアゴルフクラブを主に活動をしています。毎年の活動は 2 月ごろに 3 月から月例会の日程を決定し、その日程に従って、

3 月から月例会が行われます。年間 9 回、1 1 月まで毎月実施される事になります。

ハンデは前年の実績に従って 1 月に見直しされ、3 月から新ハンデで月例会に望む事になります。新しい参加者については 初回のみ自己申告ハンデが適用され、2 回目から正式ハンデが決まります。

参加者数は 毎回、5 組程度の人数となります。

0 7 年の反省点は：

1 0 0 を切れる参加者が減少傾向にある事。1 大会当り、6 名（3 割）が 9 0 台。理由は業務多忙と 春先からの夏場までの長期間の極暑。

新規参加者が少ない事。

新規参加希望者は大歓迎と門戸が開いていますが、参加の連絡方法が解からないことが原因の一つと思われます。希望の方は下記のメールアドレスに連絡していただければ 月例会詳細等の案内をお送り出来るようにメールアドレスに追加致します。以下の町田のアドレスにご連絡ください。

machino35@gmail.com

0 8 年の月例会の日程は未だ決定していません。2 月末までには決定できるように計画しています。

0 8 年は どんな天気予測？ 雨が多ければラフがタフとなり、ロストの確立と大叩きのリスクが高くなります。一方、極暑が続けば、プル

カートは更に重く腕に響き、次第に歩幅が狭くなり、進行が遅れ、遅れを取り戻すため、スイングが早くなり、その結果、負のスパイラルに飛び込んで行くことになります。今年はどうな天気になるやら、楽しみです。



ランニング部

今年の大会予定

盛田 常夫

今年の各種ランニング大会は、以下の日程で行われます。これらの大会参加希望者は、私のところへメールください (morita@tateyama.hu)。マラソン、ハーフマラソンなどの国際大会は、当地の事務所で申し込む方がかなり安いです。ただし、ウィーンの大会は各自インターネットで申し込みしてください

マラソン、ハーフマラソン大会

●ウィーン国際大会 (4月27日)

マラソン、ハーフマラソン同時スタート。児童のための4km走。この申し込みは、以下のサイトで、<http://www.vienna-marathon.com/> 各自行ってください。宿泊、前日の手続きなど、アドヴァイスします。

●ブダベスト国際ハーフマラソン大会

9月7日。個人レースのほか、2名によるリレー種目があります。また、子供たちの3・5kmレースもあります。

●ブダベスト国際マラソン大会

10月5日。個人レースのほか、リレー種目、30km走があります。

個人ロードレース

●T-COMヴィヴィチッタ

4月13日。12km、6・5km、3・5kmの三種目。

●フローラ女子フェスティバル

5月17日。6・5km、3・8kmの個人種目のほか、3名のリレー (1・5km x 3) があります。

●ブダベスト10km

5月31日。5kmレースもあり。

●コカコーラ女子

10月19日。10kmの個人とリレー。3・6kmレースもあり。

マラソン・リレー

●K&Hマラソンリレー

例年、チームを作って参加している大会です。リレーだけの大会で、全国から500チームほど出場します。女子は3名でハーフマラソンチームを構成します。1人7kmがノルマです。

この他に、前座レースとして、2・1km x 3のレースもあります。昨年、日本人学校のチームが参加しました。

●フローラ女子、コカコーラ女子

既述したように、この二つの大会でも、リレー種目があります。

この他に、ブダ丘陵のハーフマラソン (4月27日)、ウィーン・ブダペスト・ウルトラマラソン最終区間の国際ハーフマラソン (10月23日) もありますが、この二つの大会はコースの高低差が大きく、たいへん厳しいレースになります。

日本人学校

「第二十八回海外子女文芸作品
コンクール」入賞作品

短歌の部 特選

小学部 六年 松下 隼也

石の街を

ゴール目指して 走り出す

ドナウの横を 息をきらして

俳句の部 優秀

小学部 五年 小林 亜海

竹とんぼ

みんなで飛ばし 夏空へ

俳句の部 優秀

中学部 一年 右手 あんな

風鈴や

風の流れるを 耳で追う

詩の部 佳作

小学部 二年 菖蒲 結衣

バスのうんてんしゅさん

ハンガリーにきてから

バス、でん車で

とうこうすることになった

朝バスにのるとき

あいさつをするとき

えがおで

あいさつをしてくれた

そのとき、とても

いい気持ちになった

朝いいことがあると

学校でもいいことが

あるようになった

俳句の部 佳作

小学部 一年 園田 葵衣

なつのそら

のびるぞのびる しろいくも

小学部 一年 布留川 結衣

どんぐりを

みつつみつけた またひろう

中学部 一年 橋本 直樹

ドナウ川

花火をうつす 水面かな

第3回ドナウ祭

感想文特集

ドナウ祭を終えて

小学部 四年 野際 美奈

「次は小学部三四年生による、『みかぐら』です」

私は入場するときにはちまきを直し、腰ひもをぎゅつとしめ、はつぴをきちんと整えてからステージへと歩き出しました。そのときには、まちがえずにおどれるかな、ハンガリー語をまちがえずに言えるかな、げきでは一つ一つのせりふをまちがえないかな、とたくさんの方の不安が私の前に待ちかまえていたのです。

ステージに上がるとたくさんの方がこちらを見つめ、私の不安は風船のようにさらにふくれてしまいました。私はその風船のようにふくらんだ不安を、ぽんと割る気持ちでいきたいなと思っていました。

たいこの音が始まったとき、今度是不安ではなくきんちようが押しよせてきました。客席ではビデオをとっている人や写真を取っている人、じっと見ててくれている人と色々でした。私は（練習のときより少しだけ人が多いだけ）と自分にうそをつき、きんちようをまぎらわしました。たいこの前そうが終わると、私をまちかまえていた「不安」という風船がまた、ぷくつとふくらみました。私はその風船を割るようなつもりで、

「はいっ」
とさけびました。

おどり続けているとだんだんきんちようも不安もなくなっていき

ました。おどればおどるほど体が軽くなり、おどるのが気持ちいいと思えるようになりました。たいこの音が終わったとき、私はとても幸せな気持ちでした。ステージ発表は大成功で客席からたくさん拍手をもらい、今までにないくらい幸せな気持ちでした。

午後はワークショップの部です。みんなはいそいそとじゅんぴを始めました。それをぽかんと見ていた私もやっとじゅんぴをしなければという気持ちになりました。ワークショップの部のオープンが近づくにつれて、みんなそわそわし出しました。私たちの「伝え合い教室」に並んで待つてくれている人もいました。

私は受付でスタンプカードの説明の係です。アイマスク体験のことを話し終わるとまた次のお客様さんが来て、また私は説明をしてと、そんなことを何回もして声がかれて

しまいました。（でもこれは、お客さんがたくさん来てくれているし、ようこだ。何も話さずに、声をからさないよりはずっとましだ）と思うと、ますますやる気がわきました。文化祭の一日はとても疲れたけど、楽しかったです。ドナウ祭のことは一生忘れたくない思い出になりました。

ドナウ祭を終えて

小学部五年 杉田 夏生

十一月十七日、ドナウ祭が行われました。今まで練習してきたものをやりとげられるか心配でした。五年生が行うことは六年生といっしょに行うハンガリーダンス、音楽では「春風ふけば」五年生以上で行うリコーダーアンサンブル「遠くへ行きたい」です。

ハンガリーダンスでは練習中もいろいろなへんこうがあり、覚える

ことがまず大変でした。一番大変なところは男女が別々になり、それぞれが直線で平行に進むところでした。練習ではヘビのようにグニャグニャした線にしなければなりません。

「春風ふけば」では歌っているうちに音程が下がっていつてしまい、それを直すことが大変でした。「遠くへ行きたい」のえんそうでは終わりのほうのフラットが出てくるどころでした。なかなか思うように手が動かず、音がずれてしまい、頭の中は真っ白になってしまいくらいでした。

ワークシヨップでは前日からの準備も行えないところがありました。それはステージではできなかった太鼓のひろうです。この太鼓では一回目は緊張していたせいか最初の「ドンドンコドッコドコ」のたたきを、手を逆にしてしまいました。何とかうまく修正できました。太鼓のひろうが終わって教室に

行ってみると、何と十人以上の人が列を作って待っていてくれました。(うおおー、やったー。)ぼくは(なんだか、このワークシヨップだけお客が来ている気がするなあ)とすまない気持ちでした。

再び、最後は太鼓です。最後なので、力を入れてたたきました。体中のせいか周りが真っ暗に見えました。えんそうが終わるとなんだか一日の疲れがどっと出てきてしまったようです。

すごく忙しかったけれど、なぜかなるという気持ちがあったような気がしました。

みんなで作ったハンガリーダンス
小学部六年 山下 芽惟

「右、右、左、左。」
今は金曜日の六時間目。ドナウ祭に向けて一回目のハンガリーダンスの

練習中だ。今年のハンガリーダンスは去年よりステップが難しかった。さっきから間違えてばかりだ。

「じゃこのステップを音楽にあわせてやってみよう」

(はあ。もういいよ・・・)

難しくてなかなかできないのでもうやりたくなくなっていた。

「右、右、左、左・・・次どうだっけ」

また分からなくなってしまった。一回目からもう練習が少しいやになっってしまった。

次の金曜日に先週やったステップの復習をした。もうほとんどの人はできている。わたしは相変わらず間違えてしまった。

(このままだとおいていかれるかも・・・)

そこで私は家でステップの練習をすることにした。特に苦手なステップは何回も練習した。
「右、右、左、左、一、二、三。や

ったーできた」

初めて完璧にできた。

次の金曜日。また苦手だったステップの復習だ。家で練習した甲斐があつてもう完璧だ。ステップが完璧にできるようになったからか、ハンガリーダンスの練習が楽しくなった。

「ようし、当日まであとちよつとだけど頑張ろう」

ドナウ祭当日。朝早く来て衣装を着た。

「おはよー。いよいよ本番だね」

そんな会話があちこちから聞こえてくる。着替え終わって体育館に行った。ステージも用意してあつていつもと全然雰囲気が違う。リハールも終わって、いよいよ第三回目のドナウ祭が始まった。一・二年生の劇が終わり、三・四年生の「みくら」が始まった。

（これが終わったらいよいよハンガリーダンスだ。）

「次は五・六年生によるハンガリ

ーダンスです」

順番がきた。とても緊張するかと思つていたけど全然緊張しなかった。

「ハーロムイシュ」

掛け声が聞こえて歌い始めた。みんなが見てくれている。そう思っただけでうれしくなった。踊りだしたと思つたらあつという間に後半部分のカップルの踊り。ここは早く回るところがあつて難しいところだ。「ふわっ」。回るとすぐくスカートが広がってびっくりした。

終わったとたん大きな拍手が起こつた。思つていたより大きな拍手でびっくりしたけどとてもうれしくて気持ち良かった。今までたくさん練習してきたのに本番はあつという間に終わってしまった。今年のハンガリーダンスは去年より楽しく踊れた。

フラッグ班

中学部一年 野際 佳奈

今年はホップステップの次のジャンプの年として一昨年よりも昨年よりも、素敵なものを作ろうとみんなが団結してできた第三回のドナウ祭です。

私は実行委員として私なりに、私らしく支えてきたつもりです。その中でも「フラッグ班」として仕事をやりとげたことも今回の「ドナウ祭」の大きな自信です。

「フラッグ班」はおそらく他の仕事よりも大変な仕事だったと思います。日曜日に学校へ来たこともあり、昼休みは当たり前のように制作場所に駆けていきました。これまでの二年間も私は「フラッグ班」を担当していました。私にとつては「ドナウ祭」「イコール」「フラッグ」といってもよいかもしれせん。

今年は今までよりパワーアップ

をということで、実際のサイズに合うようにホワイトボードを使って大きく下絵を描いてみました。細かいところまで、イメージがうかびとてもよい方法であったと思います。

当日の開会式では私がひもを少しずつ引くと、ちょうどタイミングよくフラッグが広がりました。「どうだ、これが私たちの旗だ」そんな気分で、少し誇らしげになりました。日本人学校のものとして残るであろう旗です。スローガンを反映した、握り合う手、両国を渡る架け橋でした。もしかしたらこの旗は私たち「フラッグ班」の心にも架け橋をしてくれたのかもしれない。

今までにない体験

中学部二年 堀川 智生

「あーあ、明日は文化祭か。疲れるだろうなあ」と前日は言っていたが、当日はとてもきんちようして疲れなど少しも感じなかった。学校で

は疲れはなかったのだが、家に帰ったらやつぱり疲れていたのか、すぐに寝てしまった。ぼくにとって文化祭とはそんなに大きな存在だったのだろうか。

ぼくが文化祭でがんばったと思えることは太鼓とワークショップの取り組みである。

太鼓は今まで取り組んできたことを意識して、すべてを出しきるように努力した。昼休みには仲間の何人かといっしょに自分たちで練習した。上級生も自分の時間を削って手伝いに来てくれた。これらの取り組みは今までの自分にはなかったことだ。じぶんもやればできるのだと感じた。

ワークショップではとても緊張した。ワークショップの内容はペイントショップで、来てくれた人に腕に絵を描くものだった。サッカーなどで顔にフェイスペインティングというのがあるのは知っていたが、

通りかかりに見るだけで、やったこともなかった。

前日までに何回も練習したが、やはり人の腕に書くというのはこれまでの経験にないので、どうしていいかわからなかったし、人の腕のぬくもりが今までに感じたことがなかったことであつた。紙に絵を描くのは違つて人の身体に描くのは、やはり大変であつた。

なんだか、今までに体験をしたことのないことがいろいろとぼくを取り囲んでいった「ドナウ祭」であつた。

来年以降も・・・

中学部三年 小松 幹

初めて日本人学校の文化祭を経験したとき、予想外の規模の大きさに驚愕したのを覚えている。

日本の中学校でもそうだが、「文化祭」というのは、当日までの過程

がものすごく忙しい。特に開校一年目の日本人学校の文化祭は名前すら決まっていなかったので、本当に何もかもが「初めて」だった。僕はいろいろな歴史的瞬間を見ているということになるのかもしれない。

去年の文化祭では自分が考案したスローガン「洪流ブーム再来」が採用された。その文化祭で中学部は初めてのもの「和太鼓」に挑戦した。演奏については自信をもてるようになったが、ハンガリー語での太鼓についての説明は最後まで自信がもてなかった。「洪流」とはいったものの、である。

今年の文化祭では、三年連続の司会進行担当になった。この仕事は僕に結構あっていると思う。特に開会式中の「オーブニングセレモニー」はみんなにも喜んでもらえて、かなりうれしいものである。

今年の和太鼓は夏休み前から必死になって練習してきた。手にまめ

ができるほどがんばった。練習がいつも完璧とはいえない難かったが、本番はみんな百パーセントの力を出したと思う。来年は日本人学校にはいなければならない、今年以上の盛り上がりになるように後輩のみなさんにはがんばってもらいたい。

ドナウ祭で学んだこと

中学部三年 佐藤 陽香

今年のドナウ祭は、自分にとって最後ということと今まで以上に思い入れのあるものでした。それと同時に準備が忙しくとてもたいへんな文化祭でした。

ステージ発表では私たちは和太鼓を披露しました。和太鼓の練習は夏休み前から始めました。昨年も和太鼓を披露はしましたが、今年演奏したものは昨年のものよりもはるかに難しい曲でした。今年は人数の都合で中一生とは別々に練習した

のですが、中一生の演奏を初めて聞いたときの焦りは今も覚えています。彼らは自分の音だけでなく、まわりの音を聞くこともできていて、声も出ていて、音もしっかり合っていたからです。しかしこのことは自分の気持ちの中で、彼らとの団結になりました。しかし、文化祭が近づいても演奏はうまくありません。私は悔しいような、悲しいような、腹立たしいような何とも言えない気持ちになりました。もっと練習をしたいと思い、みんな朝の自主練習を行いました。先生に言われたことではなくて、私たち自身が決めて行ったことなので、なぜかとても気持ちよかったです。

そんなことがあったからか、本番では中学部のみんなが力強い演奏をすることができました。成功したことよりも、この中学部みんなが団結して一つのことを成し遂げたことが、何よりもうれしかったのです。

みどりの丘日本語補習校

現状と今後の展望

運営委員長 白石 勝久

みどりの丘日本語補習校は、もうすぐ3年目の授業を終了しようとしています。それまでの日本語補習校の全日制以降に伴って、二重国籍の会などを中心とした当時の発案が2005年4月に結実して、本校の歴史は始まりました。保護者が中心となって運営するという独特のスタイルを取りながら、これまで様々な試行錯誤や困難にも立ち向かいながら、補習校は存続して来ました。

私事ではありますが、昨年4月から娘もみどりの丘補習校に入学して、1年生クラスに通っております。来年度以降も、幼児サークルを初めとして今後補習校へ入学しようと考えて

てらっしゃる父兄の方もいらっしゃると思いますので、運営委員長としての立場に留まらず、これまでの娘の体験に基づいて、一保護者としての考えを交えて、ご報告したいと思っています。

補習校は全般に、1クラスの人数が少なく家族的な雰囲気を持っています。現在の在籍児童数は、9名です。昨年春は14名の児童でスタートしましたが、学期途中で休学されたり、全日制日本人学校へ転校されたりご家庭もあり、現在の児童数となつていきます。熱心な先生たちの指導の下、児童たちも楽しく勉強しております。1年生2名は、両親のどちらかがハンガリー人である二重国籍の子供たちですが、1・2学期を通して、ひらがなの習得を終え、現在漢字およびカタカナの学習が進んでいます。授業では、読み、書き、音読が中心で、集中力が落ちて来たら、適宜遊びの要素を入れつつ、4時間

授業を行っています。

当初、1年生は体力的にも4時間授業が心配でしたが、先生側の工夫もあり、現在では4時間授業になれたようです。1年生は、それぞれ得意・不得意に差があるにもかかわらず、概ね同じ進度で授業をすることができています。もともと、全日制日本人学校の国語の総時間は補習校の2倍くらいありますので、この時間内で同じことをやる訳ではありません。日本人学校で深く説明できることでも、時間の関係上簡単に済ます場合もあります。そのため、宿題は毎週出しました。量的にも少なくはありませんので、家で毎晩少しずつやるようにさせました。

保護者の補習校へ求めるニーズや要望も様々だと思われれます。例えば、駐在員のご家庭などで、平日はアメリカンやブリティッシュなどのインターナショナルスクールへ通っている児童には、(帰国後すぐに日本の教

育制度に適合できるように）文部科学省の学習要領に基づいて各学年で学ぶべき漢字をきちんと教えてほしいという要望があるでしょう。

他方で、二重国籍の児童の家庭などでは、基本的にハンガリーで将来的にも生活する予定であり、平日はハンガリーの小学校へ通わせるが日本語も勉強させたい。ただし、文部科学省の学年別指導要領に厳格に基づかなくても構わず、児童の進度にある程度柔軟に対応しながら勉強させたいという家庭もあり得ます。

こうした多様な異なる要望に最大限応えながら、父兄が中心となって運営していかなければならないというのが、補習校の現状であり、様々な問題に対処して行くのも、この前提を抜きにしては語れません。先生方は、この状況を踏まえながら、情熱を持って授業を行い、時には日本人学校の兼子先生との研修活動を行い、日夜研鑽なさっています。

一方、保護者の方では、補習校へ通わせておけば日本語習得は大丈夫だと安心して、補習校任せにしてしまうのは避けるべきです。毎日の家庭での学習の積み重ねが重要で、それを補習校で確認するという形が基本だと思っています。あくまで各家庭での日々の学習が主役で、補習校はそれをまさに「補う」名脇役だと認識する必要があります。現在、娘のクラスでは各児童の習得度の差はそれほどなく、先生が授業を進めていく上でもあまり問題はないのですが、これが高学年になるに連れて、各家庭での学習支援の仕方次第で大きくなってくる可能性があります。そうすると最悪の場合、一つのクラスとして授業計画を担任の先生が立てられない位の国語能力の差が出てくるという事態も想定できます。

教育は継続が重要です。しかしながら、日本で学ぶ児童にとってさえ安易ではない国語学習を、あまり日

本語に触れる環境にない海外在住の二重国籍の子供に行うのは、一筋縄では行きません。特に、保護者の側が日本語学習に対する漠然とした必要性は感じていたとしても、それを実践して行くかというかなりの犠牲を伴う困難さを、補習校で学び始めてから初めて痛感することになります。私の場合もそうでした。やればやるほど、限られた時間と金銭的な余裕の中で、娘の生活に於いて日本語学習にどの位の優先順位を置くのか、（親類や友人との交流とを含めた）家族生活をどの程度まで日本語学習の為に、犠牲に出来るのかを屢々自問して来ました。

ダンス、ピアノ、乗馬、スキー、スイミングなどいろいろな習い事も親がやらせたい、または児童がやりたいという場合もあるでしょう。週末には泊りがけで家族や親戚、友人などとの小旅行にという希望もある

でしょう。しかしながら、補習校の学期中は補習校の授業を優先させなければなりませんし、夏休みや冬休みの期間中も宿題を着実にこなしていく必要があります。

日本の義務教育で習得する日本語能力は是非持つてほしいという父親としての願いを原則的には正しいものであると自己確認しつつも、「普通のハンガリーの児童など」他の子供はもっとたくさん遊べるのに、何故自分だけはこんなに毎日漢字の勉強をしなければならないのか？」という7歳の娘の素朴な不満に対して、十分に納得させることが出来ないのがもどかしい訳です。

児童の勉強の負担を減らすという事で、学習進度を遅らせるという考えも成立するかもしれませんが。その反面、いったいどの程度まで進度を緩めればいいのかという事を考えて行くと、各家庭での学習環境が様々ではないということを考慮すれば、

そう簡単ではありません。日本の義務教育分の国語学習に仮に倍の期間をかけると、18年もかかってしまいます。

スポーツのトレーニングでもそうですが、肉体に適正な負荷をかけないと上達しません。日本語学習も同じだと思います。保護者も児童もある程度の負荷に耐えて行く事で、伸びて行くはずで、もちろん、適正な負荷の範囲内であることが大事で、過負荷は禁物です。また、様々な自発的な学習意欲を喚起するような方策をとる事で、この適正負荷のレベルを変化させる事もできます。

現状としては、一保護者として1年生の国語学習に対して、何とか家庭で支援出来たという安堵感でいっぱいです。しかしながら、今後、2年生、3年生と学年が上がるにつれて内容が増えて来た際に、どうやってハンガリーの小学校学習と両立して行けるのかと、不安に駆られます。

そもそも、娘本人が如何に日本語学習に対して動機付けできるかということが重要です。ハンガリーに生まれ、ハンガリーの学校制度で今後育っていく娘にとって、仮に父親が日本人であっても、ハンガリー語が話せる父親は自宅で母親とはハンガリー語で会話をし、他の親戚や友人もほとんどハンガリー人です。もちろん、たまに日本を訪問して私の両親に会い、その際に日本語を使うということはありますが、これが娘本人にとって、今後の膨大な新出漢字と増大する学習負担に対する十分な動機付けとなるかという不安です。

私はこれまで娘と話すときには誕生以来、日本語でと決めてきました。本人も5歳を過ぎるくらいまで、私がハンガリー語をしゃべれないものだと思っていたほどです。娘はだんだん、語彙の問題もあり自分の気持ちを詳しく言いたいときにはハンガリー語の方が楽にしかも的確に言う

ことが出来るようになっていきます。実際、それをハンガリー語よりも語彙や表現力で劣る日本語で私に對してのみ表現せねばならないというのは、大変かなあとも、内心は同情しています。

物心ついた時に、本人が主体的に日本語の習熟度を向上させて行きたいと選ぶ際に、少なくともその基礎工事の部分だけでも、親の意思で終えていたという位の事しか出来ないでしょう。娘の日本語学習に関しては、私自身もこのような特殊な状況で力にならねばならないので試行錯誤の連続ですし、ある意味で私自身の教育観、アイデンティティーを問い直す契機ともなっています。

子供達の日本語学習に対する動機付けをするには、毎週土曜の狭義の国語学習だけでは不十分でしょう。そこには何か楽しくなるようなものが含まれるべきです。限られた総授業時間数を考えると、これは授業以

外の機会に求めざるを得ません。日本人学校の文化祭を見学したり、運動会に参加するという事も過去にはありました。今後は、3ヶ月近い長いハンガリーの夏休みを利用したサマーキャンプを行い、普段漢字学習に追われる子供達に別の側面から、日本文化に触れさせるというのも一案です。例えば、習字、凧などを作成する図画工作、文部省唱歌のような日本の子供であれば皆知っているようなことを学ぶ音楽、日本の地理・歴史を含めた総合学習的なものが頭に浮かびます。

また、可能であれば、7月中旬まで開校している日本人学校への体験入学や、ヨーロッパの他の日本語補習校との相互交流、将来的には日本の学校への体験入学などを行う事で、子供達の学習意欲を引き出すことに繋がるはずです。

補習校の現状や将来に関しても、まだ不確定な部分がたくさんあります。

す。保護者が運営の主体となって維持しているものだから当たり前ですし、運営を行いつつ、その都度問題に對処して行かねばならないのです。現在小学校の6学年ですが、将来的には中学部設立の要望が出てくる可能性があります。

財政面に関しても、昨年度まで受けられた日本商工会からの補助金も今年度からは見込めませんし、本當に授業料収入のみで運営して行かねばなりません。何らかの法人化、財団化のような正式な組織作りの必要性も出てくるでしょう。教育の継続性の観点から、優秀な教員を中長期的に確保して行くことも重要な課題です。みどりの丘補習校の将来像を決めるのは、今後の保護者の方々と言えます。そのためにも、今春以降入学される予定の保護者の方々には、積極的な学校運営への関与が望まれます。

福岡伸一を読む

盛田 常夫

『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書）、『もう牛を食べても安心か』（文春新書）

たまたま茂木健一郎のトーク番組を見た。気鋭の分子生物学者、福岡伸一がゲストで、彼の持論に惹かれた。「生命とは動的均衡にある流れ」。急いでアマゾンで著作を調べ、とりあえず2冊を日本から取り寄せた。

一般に理工系の人は文章がうまくない。それには理由がある。理工系の論文には文系のような冗長な言い回しや文学的な修飾語など不要だから、自然と文章は定型論理になり、文章力を鍛える機会がない。もちろん、文系学者の文章がうまいとは一

概に言えない。読むに耐えない文章を書く人も多いが、一般論として理学系あるいは工学系の学者の文章は読めないことが多い。

しかし、福岡伸一は例外中の例外。これほど筆の立つ理系の学者を知らない。とくに、『生物と無生物とのあいだ』は、短編小説を読んでいるような錯覚に陥る。2006年の科学ジャーナリスト賞を受賞したのも頷ける。

三つの生命観

DNAの発見と解明によって、生物学は大転換を遂げた。我々が中学生時代は生物学と言えば、動物解剖と植物観察だった。ところが、「DNAの二重らせん」の解明によって、生物学は分子生物学の時代へ突入した。これによって、宗教的な生命観とは明確に区別される科学的な生命観が打ち立てられた。「二重らせん」の解明によって、遺伝子が複製され

る仕組みが明らかになり、「生命とは自己を複製するもの」という新しい生命観が科学の世界に生まれた。

しかし、福岡はこの生命規定は十分でないという。福岡が着目したのは、忘れられた生科学者シェーンハイマーである。「生命とは動的均衡の流れ」という規定は、シェーンハイマーの研究にもとづくものだ。「二重らせん」の解明は1950年代初めだが、生命観のコペルニクスの転換とも言える「動的均衡の流れ」という概念は1930年代に、シェーンハイマーによって打ち立てられた。もう一つ、興味深い生命観がある。「二重らせん」構造を解明したワトソンとクリックが生の研究に駆り立てたと記している著作である。量子力学の創始者の1人で物理学者シュレーディンガーが、隠遁生活に入って記した『生命とは何か』である。彼はこの著作で、「生物が食べることの意味」を説明しようとした。「人は

何故、食べ続けなければならないのか。この問いにたいする回答が、負のエントロピーという概念である。

「生物は絶えずエントロピーを増大させつつあるが、そのまま増大し続ければ、死の状態を迎える（乱雑さが拡散・均一化するエントロピー最大の状態）。それを避けるために、食べることによつて負のエントロピー（秩序）を取り入れるのである」。

これら三つの生命観は生命活動の本質的な部分を説明しており、相互に排他的なものではないが、総体的規定として一つを選択すれば、シェーンハイマーの規定がもっとも良く生命活動を表現しているというのが、福岡の持論である。

動的均衡の発見

機械と動物を区別するものは何か。ともにエネルギーが必要だが、エネルギーだけが必要ならば、炭素、水素、酸素があれば良い。これらは糖

や脂肪に含まれている。ところが、動物はタンパク質を摂取しないと生きていけない。人間のみならず、すべての動物は植物あるいは動物のタンパク質を摂り続けることによって、生命を持続することができ。ではそのタンパク質とは何か。

タンパク質は20種類のアミノ酸から構成される。タンパク質を摂ることはアミノ酸を吸収することだが、このアミノ酸には糖や脂肪に含まれない元素が入っている。それが窒素である。つまり、機械には不要だが、動物に不可欠なものが窒素なのだ。

そこで、シェーンハイマーは体外から摂取された窒素がどのように体内で吸収されるのかを調べた。窒素の同位元素（重窒素）をアミノ酸の窒素原子として挿入し、その同位元素がどのように体内に分布されるのかを調べたのである。この種の同位元素を標識（マーカ）として、その行方を探る追跡法は、1930年代

に分子生物学の研究手法として確立された。

さて、この研究から非常に興味深いことが分かった。体内に取り込まれた重窒素の一部は尿として体外へ排出されるが、その半分以上は体内のタンパク質の中に取り込まれることが分かった。現在の分子生物学は、タンパク質や脂質だけでなく、人間の体を構成している組織・臓器のあらゆる構成分子が、絶え間なく代謝回転していることを明らかにしている。こうして、人間を含む動物の体では非常に速い速度で構成分子・原子の代謝が行われていて、1年も経ると、すっかり原子・分子の交換が行われるというのだ。原子の世界から見ると、「1年後の私はもう1年前の私ではない」ということになる。まさに、生命は途切れることのない分子・原子の流れによって支えられている。そういう動的な流れの中で同型的な形状を保持するから、「動

的均衡の流れ」と規定できる。しかし、絶え間ない変化の中で、どうして同一的な形状が維持できるのだろうか。その答えは著書の中にあるが、もちろん現在の分子生物学ですべてが解明されている訳ではない。

二重らせん

DNAが高分子の細長い紐状物質で、らせん系の二つの紐が絡み合った形状であることを示したのが、クリックとワトソンである。これで彼らはノーベル賞に輝いた。福岡はこのような科学史の発見に、必ず先行する研究や研究者がおり、それらの人々の名は歴史の中に埋もれることが多いことを丁寧に描いている。

そもそも、DNAが遺伝子情報を保有していることに最初に気づいた人は誰なのだろう。野口英世がロックフェラー医学研究所に勤務していた頃、オズワルド・エイブリーもこの研究所で仕事を始めた。彼は肺炎

双球菌の研究から、菌の性質を変え、る遺伝子を追跡し、それが核酸（DNA）であることを突き止めたのである。これはまさに世界的な発見だった。

そこから、DNAの構造解明がノーベル賞ものの研究になった。そして、1962年、この構造解明に成功したワトソン、クリックと並んで、ウィルキンズがノーベル生理学賞を受賞したが、実は、その解明成功へ導いた決定的な先行研究があった。

1950年、ケンブリッジ大学出身のロザリンド・フランクリンはロンドン大学キングスカレッジに職を得た。そこで彼女はDNAのX線結晶学に従事した。当時、ここにはDNAの研究を専門とするウィルキンズがいたが、この二人は常に衝突していた。ワトソンとクリックはケンブリッジ大学に在籍し、ロンドン大学との競争関係にあったが、ウィルキンズはこの二人と交友関係があり、

一緒に食事するほどの仲だった。

ある日、ロンドン大学を訪問したワトソンが、フランクリンが撮影した「DNAの三次元形態を示すX線写真」をウィルキンズから見せられた。そこには「らせん」構造から生じる黒い影が写っていたのである。撮影者のフランクリンに無断で、これをワトソンに見せたのである。この事実にはワトソンの著書にも記されていて、そのため、後にウィルキンズが「データ盗用」で批判されることになる。さらに「らせん」理論を確定する上で決定的に重要な「盗用」があった。

フランクリンは1952年に、英国医学研究機構に研究報告を提出した。公的資金を受けた研究の成果を提出したのである。そして、研究資金決定の権限をもつ委員会の専門委員の中に、ケンブリッジ大学でクリックの上司にあたるマックス・ペルーツがいた。彼はフランクリンの研

究報告書をクリックとワトソンに見せた。これは明らかにルール違反である。非公開の他人の研究成果をこ

つそりと、部下の研究者に見せたのだ。その報告書には実験の詳細データが付されていたほか、最後に重要な結論が記されていた。「DNAの結晶構造はC2空間群である」。C2空間とは数学的な概念で、相互に点対称にある二つの構成単位が相互に逆方向に配置されている位相空間である。まさに、理論的究明の最後の謎が解けたのである。ワトソンとクリックが「DNAを構成する2本の紐は、相互に逆方向に対称的に絡み合っている」と結論づけるのに時間はいかからなかった。

1962年のノーベル賞は、前述の3名に加え、マックス・ペルーツにも（タンパク質の構造分析による化学賞）授与された。すでにフランクリンがこの世を去って4年の時間が過ぎていた。「共犯者たちの揃い踏

み」（福岡）が1962年のノーベル賞授賞式だった。

科学研究の発見の歴史には、このような裏話が尽きない。歴史に名が残るのは最終的な発見者だが、その発見者以上に大きな貢献をした人々が、歴史の中に埋もれているのだ。

人の体は何故大きい、何故食べ続けなければならぬのか

シュレーディンガーは「原子は何故それほど小さい」という問いにたいして、逆に「原子の大きさに比して、生物体はどうしてそんなに大きいのか」という問いを発する。何故、生物体はそれほど大きくなければならぬのか。この問いへの回答にこそ、生命の謎を解く鍵があるという。

生命を構成する原子はランダムに動く（ブラウン運動）。つまり、原子は秩序なく運動する。他方、膨大な原子が集まって運動する場合には、そこに「平均」的な振る舞いが顕在

化し、秩序が生まれる。原子の数が多くなればなるほど、この平均的な振る舞いが法則化される。一般に、平均から離れて例外的な攪乱運動をする原子の数は、平方根の法則に従う。100万個の原子があれば、その平方根は1000である。つまり、100万個にたいして、1000個の例外的な振る舞いが観察される。

生命体はこの何億倍もの原子から構成されているから、例外的な振る舞いの率は限りなく小さくなる。だから、生物体は秩序を維持するために、原子に比べて、途方もなく大きくなければならぬのだ。これが物理学者シュレーディンガーの分析である。

さらに、生物体は何故、動的均衡、つまり絶え間ない変化の中で秩序を保持できるのか。既述したようにシュレーディンガーは、熱力学のエントロピーの法則から、これを理解しようとした。増大するエントロピーを減らすために、負のエントロピー

を吸収する。それが、物理学的に解
釈した「食べる」ということなのだ。

牛を食べても大丈夫か

人は生きるために食べ続けなければ
ならないし、タンパク質を摂り続
けなければならぬ。動物性であつ
ても植物性であつても構わないが、
とにかくタンパク質を作るアミノ酸
を構成する原子・分子の摂取が不可
欠なのだ。

狂牛病の症状が何によつてもたら
されるのかは分かっている。タンパ
ク質が変形し、脳細胞が海綿状にな
ると、いわゆる狂牛病の症状が現れ
死に至る。人間の発症例としては、
乾燥硬膜の移植による発症やニュー
ギニアの食人種族（死人の脳を食べ
る習慣）における発症例が知られて
いる。牛における発症も、狂牛病に
感染した廃棄牛の肉骨粉の飼料が原
因だということも分かっている。
しかし、今になつても、感染のメ

カニズムがまったく解明されていな
い。異常タンパク質が増殖すること
から発生することは分かっているも、
何を媒体として、どのようなメカニ
ズムで感染し、増殖するのかがまだ
解明できないのだ。この伝染病原体
（タンパク質性病原体）をプリオン
と命名したものの、病原体そのもの
の解明も、それが動物から人間へど
のような媒体とメカニズムで感染す
るのかも、未解明のままである。プ
リオンという言葉だけが一人歩きし
ている状態だ。

福岡の言う「動的均衡」に従えば、
生命体を構成するタンパク質は常に
創造と破壊が繰り返されている。あ
らゆるタンパク質にはそれと相互的
に作用する相補性をもつタンパク質
があり、それがくつついたり離れた
りしながら、傷ついたタンパク質を
取り除き、それを新しいタンパク質
で置き換える営みが絶え間なく繰り
返されている。そのメカニズムが効

かなくなり、異常タンパクが正常タ
ンパクに結合して蓄積していけば、
エントロピーが危機的な状況になる。
狂牛病のメカニズムは未解明だが、
生体に取り込まれた異常タンパクは、
分解されて消化器から血液に入り、
体全体をめぐることになる。それが
脳に滞留し、増殖するとしても、そ
れ以外の部位が異常タンパクに汚染
されていないという保証はない。だ
から「危険部位だけを除去すれば安
全」という判断には、何の科学根拠
もない。あくまで便宜的な判断なの
だ。

草食動物に仲間の肉骨を食わせる、
死人の脳を食らうという自然の摂理
に反した人為的操作が、新しい病を
発症させている。遺伝子操作も、自
然の摂理に反することになれば、新
しい病を発症させる可能性がある。
それを知る上でも、異常プリオンの
感染メカニズムの解明が待たれると
ころである。

小話

電車とタクシー

岩井 孝博

とうとう来ちまった。いいなあ、この国、のんびりしててよ。空気がそう言ってる。なんていいながら来ましたガム公とチョコ坊。早速飛行場から電車に乗って、都心へ行く事にした。

「ね、切符買わないと、どこで買うの？」

「どこだろ、ま、乗ってからでも買えんじゃないか？」

「三〇〇フォリントって言ったっけ？」。来た電車に乗ると、来ましたオバさん車掌。手を出すとお客さんが切符を見せ、検査鉢を入れている。ガム公とチョコ坊の前にも来て手を出す。その手にチョコ坊が二〇〇フォリント二枚渡した。オバさん車掌は、受け取ると、オーケーと言って先へ行ってしまった。「え…なに、これ、切符は？」

ガム公がオバさん車掌に、ボオチャノツトと声を掛けると、振り向いて、オーケーと言って次の車両に消えてしまった。

「一〇〇フォリント損したじゃない」

「一〇〇フォリントで面白いこと見た気がしないか？」

ガム公が言うのと、チョコ坊は何が、どうしてと聞く。

「いいか、ここハンガリー、日本じゃないって事だよ」

「分らないわね？」

「あの車掌、切符と一〇〇フォリントのおつり出すより、現金の四〇〇フォリントが欲しかったんだよ」

「ああ、でも、駅で切符出せって言われたら、どうすんのよ」

「そんな時は、訳を言って、あの車掌を引き合いに出せばいいんじゃないか？」

「そうね…」とは言ったがなんとなく不安なチョコ坊。さて、ニュガティの駅に着き、どこが出札口かと思って歩いて、気が着いてみれば、そこは路面電車の走っている繁華街。二人は、思わず顔を見

合わせ、振り向くと、大きな大きな駅舎がある。その右手には、世界で一番綺麗なマクドナルドが在った。目指すアサトンホテルは駅の近くというが、分からない。

「タクシーで行くか？」

言ってる所に呼び込み屋が来て、そこまで三〇〇〇フォリントと言うが、胡散臭いから別を選んだ。そつちはメーターですと言う。これなら安心と乗っていく。

二五〇〇フォリント。

「やつぱり安かったね」

ホテルに入って一息ついて窓を開けたガム公……

「チョコ坊、あれって、さっきの駅じゃないか？」

「歩いて来れたんじゃない」
……やつぱり……



牛で見る世界経済（作者不詳）

伝統的保守経済

2頭の牛がいる。1頭を売り、その代金で羊を買う。こうやって、家畜資産を増やし、余剰の所得を年金に振り向ける。

インド経済

2頭の牛がいる。これを神聖なものとして、崇める。

パキスタン経済

牛は1頭もいない。インドの牛が欲しいと言う。世界に向けて、支援を乞う。「米国はお金を、中国は軍隊を、英国は武器を、イタリアは工業設備を、ドイツは技術を、フランスは潜水艦を、スイスは有利な融資を、ロシアは医薬品を、

日本は工場を無償で与えよ」と。獲得した支援金でインドから牛を買い、「世界は我々を搾取している」と叫ぶ。

ブッシュのアメリカ経済

牛が2頭いる。1頭を売り払い、もう1頭に4頭分の搾乳を強いる。しかし、突然、牛は死んでしまう。そこで、牛が自然のままに放牧されている国に目を向ける。そして宣言する。「この国は人権侵害の危機に晒されている」、と。そして、世界防衛のために、この国を攻撃し、牛を自分のものにする。



フランス経済

2頭の牛がいる。だが、3頭欲しいのでストライキする。

ドイツ経済

2頭の牛がいる。この牛を百歳まで生きるように改良する。月に一度だけ飼料をやれば、自然と成長するように。

イタリア経済

2頭の牛がいる。しかし、どこにいるのか分からない。だから、昼寝（シエスタ）する。

日本経済

2頭の牛がいる。これを改良して、10分の1の大きさにして、20倍の搾乳ができるようにする。そこから、アニメ映画の主人公を作って、世界に売りさばく。

ロシア経済

2頭の牛がいる。ところが、数えて見ると5頭いる。もう一度数えると、72頭もいる。さらにもう一度数えると、17頭だ。もう数えるのを止めにして、もう1本ウオツカを浴びる。

ナイジェリア経済

2頭の牛がいる。1頭を食べて、盗まれたと報告する。警察が捜査を開始して、辺り構わず住人を拘束する。誰かが盗んだと自白するまで拷問する。処罰として拘束した住民からそれぞれ1頭の牛を提供させる。こうして1頭は最初の告訴人に渡し、警察官は牛の牧場の所有者になる。

スロバキア経済

2頭の牛がいる。土地の実力者がそのうちの1頭を食べてしまった。そして、「ハンガリー人少数民族が

牛1頭を盗んだ」と告発する。警察はハンガリー人被疑者を拘束し、証拠がないまま容疑者として検察に引き渡し、告訴する。ハンガリー人の抗議にもかかわらず、「スロバキアの支配を狙うハンガリー民族主義者の仕業」と判決を下す。

チャウシエスクのルーマニア経済

牛2頭がいる。地区の共産党指導者が輸出のためと称して、農民から1頭を供出させる。それを解体して、一部を自分で消費し、残りを市の共産党幹部に進呈する。この幹部は一部を自分で消費し、残りを県の幹部に進呈する。県の幹部は一部を自分で消費し、残りを党本部の幹部に進呈する。党本部の幹部は、チャウシエスクに牛1頭の輸出成果を報告し、チャウシエスクはルーマニアの牛の輸出増を褒め称える。

ハンガリー経済

国营農場に2頭の牛がいる。農場の責任者がその乳を家に持ち帰り、「この農場は赤字だから、民営化しなければならぬ」と証明する。名目的な価格で農場を売却することにして、地方紙の自分しか購読していない新聞に公告を出す。その責任者はこの民営化に応募し、何とこれを落札する。そして、すぐに記者会見を開き、「この貧弱な牛を引き受けることが、どれほどの負担になるか」を訴える。この後、この農場責任者は政界に進出し、当初の2頭から無数の牛を手にする。

